

笛吹市探訪

③ 笛吹市の史跡

二つの塔、寺本古代寺院と甲斐国分寺の塔跡

笛吹市内には、山梨最古のお寺である「寺本古代寺院跡」(春日居町寺本)と奈良時代に聖武天皇の命令で建てられた「甲斐国分寺跡」(一宮町国分)の2カ所に、古代の塔跡が残されています。今回の笛吹市探訪では、この二つの塔についてお話ししたいと思います。

6世紀後半に朝鮮半島を通じて伝えられた仏教は、最先端の文化や技術を日本にもたらしました。朱塗りの柱と漆喰(しつくい)の壁に彩られたお寺の建物、その中でもひときわ高い塔は、当時の人々に大きな衝撃を与えたといえます。

塔は、お釈迦(しゃか)様の墓とし



寺本古代寺院跡三重塔 復元模型

て建てられたもので、お寺の象徴的な建物でした。お寺の塔というと、一般的には三重塔や五重塔などの木造の層塔を指します。現在では三重塔と五重塔しか残っていませんが、かつては、飛鳥の百済大寺(くだらたいじ)で九重塔、奈良の東大寺などで七重塔が建てられていました。特に、東大寺の塔は、100 を超えていたと伝えられています。

塔の建物は平面が正方形で、中心に「心柱(しんばしら)」という根元から天辺までを貫く柱が建てられています。柱を支える石を「礎石(そせき)」、その中でも、心柱を支える礎石を「心礎(しんそ)」と呼び、

心礎にはお釈迦様の骨である「舍利(しゃり)」が納められていました(多くの場合は、水晶などで代用されます)。ですから、建物が壊れて無くなっても、柱を支えていた礎石の置き方によって、塔の大きさなどを推定することができます。

冒頭で紹介した寺本



寺本古代寺院塔跡 発掘状況

古代寺院跡には、心礎だけが残されていました。発掘調査により、一辺が約5・4の建物であったことが分かりました。この大きさは、奈良県の当麻寺(たいまでら)にある東西二つの三重塔とほぼ同じです。そのため、寺本の塔は、高さ24 程度の三重塔であったと推定しています。

一方、国分寺の塔は、七重塔を建てるようにと命じられていました。天平13年(741年)に出された国分寺建立の詔(みことり)の中に、「それ造塔之寺(ぞうとうのてら)、兼ねて国の華と為す」と書かれています。塔は「国の華」、つまり古代甲斐国のシンボルとして考えられていたようです。

国分寺の塔跡には、心礎を含めて14個の礎石が残っていて、一辺が9・8 あります。この

大きさは、京都の東寺にある五重塔に匹敵します。そのため、国分寺跡の塔は、高さ50 程度の七重塔あるいは五重塔であったと推定されています。山梨県内には、その後いくつかの塔が建てられましたが、国分寺の大きさを超える塔は現れなかったことから、この塔が県内で最大の塔であったと言えます。

また、国分寺跡の北側にある甲斐国分寺跡には、塔が建てられていません。これは、全国の国分寺跡に共通していることなのですが、国分寺と一体の存在と考えられていたことが、その理由のようです。

高層建築のなかった当時、寺本と国分寺の二つの塔は、新しい文化の到来を示す存在だったのではないのでしょうか。二つの塔がそびえる姿は、甲斐国千年の都を象徴する景観だったと想像できます。



甲斐国分寺塔跡 発掘状況